

月十五日、四平街にて終戦。十月一日、黒河を經由して入ッ。

昭和二十三年六月一日、永徳丸にて舞鶴港に入港。復員するまで約三年の抑留生活。

今、思い出しても腹の中が煮え返る。誰のために、何のために、あのような苦しい目に遭ったのか。

通説には、六十万抑留、六万人死亡となっているが、そんな数字は何の根拠もない、いかげんなものだ。根本から調査をし直すべきである。

作業は道路工事、水道管の敷設作業、セメント、石炭の貨車積み下ろし、バイカル湖にて船の荷下ろし、主にジャガイモなど野菜類、冬の伐採作業等々あらゆる作業をやらされた。

五十年たった今も時々夢に見たりするのは、伐採作業中、身体が思うように動かないため、切り倒した材木の下敷きになって死亡した仲間達を、凍りついたまま車の荷台に乗せて収容所へ連れ帰ったのだが、それがどのようなにして、どこに埋葬されたかは、我々には一切知らされないまま処分されてしまったことだ。こ

んなひどいことがあるでしょうか。ロシアの記録には何も残っていないと思うが、そのままでもいいことでしょうか。

食事とは名ばかり、大豆のスープとは、汁の中に大豆の実が数えられるほど入っている塩汁であった。豆かす、コウリヤンなど馬糧を食べさせられた。それでロシア人と同じ待遇であったとはとても思えない。

医務室とは名ばかりで

薬も包帯もなし

岐阜県 安江 崑三郎

大正五（一九一六）年生まれの私は、昭和十七（一九四二）年十二月に召集され、名古屋陸軍病院要員として静岡の部隊で本科教育を受け、十八年二月に名古屋陸軍病院に、衛生兵教育を三カ月受けた後、四月、釜山より満州へ渡り、南満の鞍山野戦病院に勤務しておりました。

終戦の年の十二月に入ソ、イルクーツクより山の中へ入りました。何という地名であったのか一切記憶がありません。衛生兵であったので医務室勤務とか言われましたが、医務室とは名ばかり、薬もなければ包帯もなし。こんな有様でいかにしてまともな治療ができるのか、不思議に思っておりました。作業員に欠員ができるのと作業に駆り出されました。仕事は伐採でしたが。大きな樹木を二人でノコギリを使って切り倒すのですが、なかなか呼吸が合わず苦勞しました。

作業の帰り、疲勞した身体に何キロもの行軍は、栄養不足のため思うように足が出ません。座り込んでそのまま眠ってしまう兵隊もありました。自分の事で精いっぱい我々にはどうすることもできません。恐らくそのまま凍死したものと思います。そんな事がたくさんあったようです。

最初のうちこそお互いに励まし合ってきましたが、だんだんと仲間意識も薄れ、考えることは自分の事ばかり、人間とは何と悲しい生き物かと、今思い出すたびに慚愧の念にたえません。

せめて、安らかに眠ってくれとひたすら祈る毎日です。

我が父・長崎博良(旧姓・相澤)の

シベリア抑留記

熊本県 松本 聡子

大正十(一九二二)年生まれの父は今年七十九歳。平成元(一九八九)年に咽頭ガンによるのどの全摘手術、そして平成十一年には下腹部のガンによる摘出手術を受けた。以来すっかり足腰も弱り、ほとんど寝たきりの生活になってしまった父。父の体はやせて小さくなり、手も足も驚くほど真っ白でか細い。しかし十五年前、三年間、父はあの過酷なシベリア抑留生活を耐えた強靱な肉体と精神力の持ち主でもあるのだ。今や声は失い、しゃべることもできなくなり、また目はかすれ、体力的にも書くことがおぼつかなくなってしまう父に代わって、娘の私が、昔、父に聞